

「実践的唯物論」の必然性について

(東京唯物論研究会編『燈をともせ』第28号、2019年8月)

島崎 隆

『燈をともせ』第27号(2018年11月)に掲載された「『マルクス主義の創造的適用とは何か』に関する雑感」*1という短論文で、長島功氏は、マルクス主義哲学を特徴づけるにさいして、「実践的唯物論」という命名は適切ではなく、むしろグラムシ的な意味で、「実践の哲学」という呼称が適切であるということなどを提案された。「実践的唯物論」という命名にこだわってきた私としては、氏の問題提起に応える必要を感じたので、ここで私論を述べたい*2。

まず私は、議論するさいに、①マルクス自身のオリジナルの哲学ないし思想がいかなる性格と意義をもつものかという問題と、②そのマルクスに発するマルクス主義哲学を現代的にどう適用し、発展させるべきかという問題を明確に区分する必要性を感じている。長島氏は、この両者をあまり区別せず、②に力点を置いて議論しているようである。氏が「『唯物論』という言葉が時代にそぐわなくなっている」(11頁左)と強調するとき、実は氏は②の問題を念頭に置いているといえよう。もちろんこの両問題は密接に関連しているが、私は、①の問題をしっかりと再認識することが、②の問題を説得的に展開できることにつながるものと考えている。

さてまずは①の問題から論ずる。マルクスの思想を「実践的唯物論」と称するさいに、マルクス自身の思想がいままでマルクス・レーニン主義哲学などと同一化して議論されてきたことが、ソ連・東欧の社会主義諸国の崩壊と関わって、かつて深刻に反省されてきた。すでに私はこの問題を詳細に論じてきたので、再論しない。いわずもがなのことであるが、私はマルクスの思想こそが、現代に通ずる資本主義(近現代の市民社会)への体系的かつ根本的な分析と批判を含む史的唯物論を核心として、さらにエンゲルスに由来する弁証法的自然観を基礎に置き、加えるに弁証法というような方法論や認識論も備えており、そのうえで社会全体の政治的・経済的な変革を目指すという点で、他の哲学・思想と比べてもっとも全体的で有効な考えであると信じている。世には多くのきらびやかな哲学・思想が存在し、個々の点ではマルクス主義哲学よりもすぐれた点をもつと思われるが、以上で簡単に述べたように、最重要の部分でマルクス主義の哲学にまさるものはないと考える。

ところで、長島氏の指摘するように(10頁左)、マルクス自身は「実践的唯物論」とい

う呼称を使ったことはない。だが、周知のように、『ドイツ・イデオロギー』で自分たちを「実践的唯物論者、すなわち共産主義者 die praktischen Materialisten, d.h. Kommunisten」*3と呼んでいる。そこから、彼の立場を「実践的唯物論 der praktische Materialismus」と呼ぶことはさしつかえないのではないか。そして彼は、「フォイエエルバッハ・テーゼ」の第10で、自分の立場を従来の「古い唯物論」と対比して、「新しい唯物論」と呼んでいる。だから、この「新しい唯物論」を「実践的唯物論」と規定することができるであろう。さらに、マルクスの哲学を「実践的唯物論」と規定できるとしても、より広くマルクス主義の全体的認識を含めるさいには、「批判的・唯物論的社會主義 der kritische und materialistische Sozialismus」*4というような名称がふさわしいだろう。マルクス主義哲学はこの社會主義思想の一部門である。

さて東独では、かつてこの実践的唯物論についての論争を「第二次実践論争」（1966年以後）と名づけており、これを「実践的唯物論論争」とは呼んではいない*5。日本以外で、マルクス・レーニン主義哲学に対抗したこの試みを「実践的唯物論」と名づけたことがあるかどうかは、詳しくはわからない。ある東独の哲学者は、この立場を、ユーゴスロヴィアの哲学を念頭に置いて、「実践の哲学」と呼んでもいいと私に語ったことはある。中国ではマルクス主義哲学のこの論争を「実践的唯物論論争」と呼んでいると、中国の哲学者から聞いたことはある。また、もう資料が紛失してしまったので、当時の西独のマルクス主義哲学者たちがこの点でどういう議論をしたのかはわからない。

以上のようにして、マルクス自身に発する思想の基本的特徴を含め、それを「実践的唯物論」と名づけることの正当性を、形式的には示しえたと思う。だが長島氏は、短論文の最後で、「筆者は、現代におけるマルクス主義哲学の呼称としては、『実践の哲学』が最もふさわしいと考える」（12頁右）と結論する。氏は“Materialismus der Praxis”などの外国の事例を紹介したりするが（10頁左）、いずれにしても、氏が念頭に置くのは、グラムシ的な「実践の哲学」であり、この点で、「『実践的唯物論』ではなくグラムシが発展させた『実践の哲学』がマルクスの哲学の現代的な創造的發展の一つの形態である」（11頁左）と結論する。さきに私は、「実践的唯物論」の必然性を説明したわけだが、なぜ氏はグラムシの「実践の哲学」の呼称に固執するのか。そこには、現代につながる氏の現実認識がある。そこで上記②の論点に移る。

氏の論点をあえて整理すれば、「唯物論」を忌避する理由として、三つのことがいわれ

ているようである。第一は、「唯物論」を唱えた後期エンゲルスによる「マルクス主義の科学主義化と客観主義化」（10頁左）、さらに第二インターにおけるその継承の問題である。第二に、すでにヘーゲル観念論以後、「ブルジョア的観念論哲学」（10頁右）自身が、キルケゴール（実存）、ニーチェ（超人）、フッサール（事象そのもの）、さらにハイデガー、プラグマティズム、分析哲学などが、単なる抽象的な観念論哲学ではなくて、それなりに「現実主義的」（10頁右）な性格をもってきたという問題である。第三に、グラムシ自身が「合意」「ヘゲモニー」「知的道徳的指導」などの概念、総じて「市民社会」の豊かな構想を発見して、単なる「唯物論」の強調ではなく、「実践の哲学」のもとでマルクスの哲学を現代で創造的に発展させたということである。

以上を吟味してみると、第一のエンゲルスの不十分性への批判こそ、私の指摘を含め、マルクス的な「実践的唯物論」が批判対象としてきたものである。そしてこうしたエンゲルスを神聖化して継承してきたのは、まさにマルクス・レーニン主義哲学、スターリン哲学なのであるから、エンゲルスへの指摘はこの哲学に該当するといえよう。長島氏は、「実践的唯物論」が批判してきたマルクス・レーニン主義哲学の中身に言及せずに、そこで現れた哲学の多様な問題点を、「実践的唯物論」に押しつけているようである。第二の点についていえば、「哲学の党派性」の名のもとで、唯物論か観念論かの問題を抽象的レベルで強調したのも、このマルクス・レーニン主義哲学であり、けっして「実践的唯物論」ではない。第三の点に関しては、グラムシが強調した、豊かな市民社会の構想こそ、『パリ手稿』や『ドイツ・イデオロギー』などの初期マルクスでおもに展開されたものであり、まさにそこでの疎外論、市民社会論、史的唯物論などに注目した立場こそ、「実践的唯物論」であった、といえる。そして初期マルクスを理解せず、それを未熟な思想だとして批判してきたのは、まさにマルクス・レーニン主義哲学のほうであった。だから、氏が「唯物論」の名のもとに批判してきた論点は、すべてマルクス・レーニン主義哲学ないしスターリン哲学に該当するといって過言ではない。実際、日本を例にとると、かつて「実践的唯物論」を唱えた論者たちが、それ以後、観念論批判に没頭して、それ以外の哲学・思想的問題の豊かさを無視してきたかといえ、事態はまったく逆であり、全国唯研のレベルでも、明らかに豊かな思想的・現実的問題が考察されてきたのである。氏自身はこうして、マルクスの物質代謝論や、疎外・物象化論、労働と生活の問題、文化・教育の問題に注目すべきだというのが(11頁右)、実際、これらの取り組みは、多くの論者によって、事実やられてきたのではないか。私自身も哲学的・原理的問題のみをやっただけではなく、物

質代謝論を含む自然環境問題を、マルクス自身のなかから展開し*6、さらに現代の教育問題・宗教問題・文化問題などにも取り組んできた。さらにまた、各種の非マルクス主義哲学とも批判と対話を試みてきたのであって、けっしてそれを単に「観念論哲学」だとして弾劾してはこなかった。そうする態度が、実践的唯物論の精神に基づいていると考えるからである。

ところでグラムシ自身の「実践の哲学」をどう評価すべきか。彼はマルクスのフョイエルバッハ・テーゼをよく知っていたとされる。もしそうならば、以上での私の展開に従って、やはりマルクスの立場を「実践的唯物論」と名づけるべきであろう。マルクスは第一テーゼのなかで、観念論の側が「活動的な側面」を展開したというが、それでも、それを継承した、マルクスの「実践の哲学」は唯物論サイドからのものであり、だからそれは、「実践的唯物論」にほかならない。それは実践を強調するといっても、カント的な『実践理性批判』的な道德哲学でもなく、ヘーゲル的な絶対精神による労働の把握でもなく、周知のように、物質的労働を基盤に置く「実践の哲学」であり、現実の社会変革を最終目標とするという意味で、正しく「実践的唯物論」と名づけられるだろう。「実践的唯物論」とは、唯物論と観念論の対立や相互浸透を踏まえた、古代ギリシャ以来の長い哲学史的な展開を前提とした名称でもある。問題はその内容を正しく把握し、また多様な現実問題をとらえるための原理的認識とすることである。抽象的な原理だけを強調しても、意味はない。私はグラムシには詳しくないが、知的・道徳的なイニシアティヴや、同意によるヘゲモニーの獲得、陣地戦論や市民社会の豊かな構想、有機的知識人論など、彼の政治哲学はたしかにマルクス以後の現代的な革命的実践に重要であると考ええる。だが、やはり「実践の哲学」という名称はマルクスにはふさわしくはない。それでもグラムシ自身は、マルクスとエンゲルスを「実践の哲学」の創始者と名づけているようである*7。

とはいえ長島氏は、「実践的唯物論」に代わる「実践の哲学」の立場をしっかりと貫いているようには見えない。それは以下の点に現れる。

氏は「実践の哲学」に依拠して、「問題はむしろ自然や人間の感性を動的かつ主体的に理解することに尽きる」(11頁右)と提案する。このこと自体には異論がないが、これこそ、自然と感性の重視として、「実践的唯物論」の立場ではないか。また芝田進午氏を引き合いに出して、氏は「人間の歴史を自然史的過程の一部として捉える自然史的唯物論という哲学形態もマルクス主義哲学の呼称としてふさわしいのではないかと考える」(12頁左)と

も述べる。だがこれもまた、唯物論的ではないだろうか。「実践の哲学」はどこへ行ったのだろうか。ところで氏は、「東京唯物論研究会」という名称も変えるべきであり、「東京唯物論哲学研究会」がいいと提案するが、私にはあまり説得的に見えない。従来の名称に「哲学」がはいっただけである。氏はこれに尽きない論点を展開しているが、以上にとどめたい。長島氏および読者諸氏はどう受け止められただろうか。

*1 以下、長島氏の引用は、本文中に頁数、右欄か左欄かを記する。

*2 詳細は、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』こうち書房、1997年、序章第三節、第二章などを参照。関係する最近のものとして、島崎・岩佐・渡辺編著『戦後マルクス主義の思想』社会評論社、2013年所収の拙論「《実践的唯物論》への道程——政治と哲学の距離」（第二章）。拙論「マルクス主義的唯物論の変貌とヘーゲル・マルクス関係の再検討」、東京唯研編『唯物論』第92号、2018年所収の、第三節、第四節を参照。

*3 Marx, Engels, *Die deutsche Ideologie*, Text, bearbeitet von Inge Taubert et al., Akademie Verlag, Berlin 2003, S.7. 渋谷正編訳『ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、1998年、48頁。

*4 MEW 19, 229. マルクスによる名称。

*5 Vgl. M. Thom, *Zur Geschichte der marxistisch-leninistischen Philosophie in der DDR*, Dietz, Berlin 1979. における「実践論争」の項目を参照。ここでは、ヘルムート・ザイデルの論文「現実にたいする人間の実践的かつ理論的關係について」（*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Heft 10, 1966.）が初発的なものとして挙げられている。なお日本では、芝田氏がマルクス／エンゲルスによる「実践的唯物論者」という表現から、「実践的唯物論」という用語を提起している。コーディング／ザイデルほか『現代のマルクス主義哲学論争』（芝田進午編訳）青木書店、1970年、323頁参照。いずれにせよ、ドイツや戦前日本で「実践的唯物論」という用語そのものは、すでに使われていた。この点、前掲拙論「《実践的唯物論》への道程」60頁参照。

*6 たとえば、拙著『エコマルクス主義』知泉書館、2007年参照。

*7 片桐薫編『グラムシ・セレクション』平凡社、2001年、327頁以下参照。なお、グラムシ研究者の松田氏と小原氏は、ともにマルクスのフォイエルバッハ・テーゼにも触れつつも、マルクスの立場が「実践の哲学」であるのか「実践的唯物論」であるのかというような問題提起はしていない。松田博「グラムシとマルクス」、小原耕一「グラムシはマルクスをどう読んだか?」参照。ともに、季報『唯物論研究』第145号、2018年所収。